



Title	<書評>John Heil, "The Universe As We Find It", Oxford : Clarendon Press, 2012.
Author(s)	雪本, 泰司
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 175-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

John Heil***The Universe As We Find It***

Oxford: Clarendon Press, 2012.

雪本 泰司

はじめに

我々がこの宇宙について日常の中で語る真理は物理学の真理に還元される。個別科学（生物学、心理学、社会学、人類学、etc.）がこの宇宙について語る真理は、物理学の真理に還元される。このように考えてしまう誤りは、言語化された形而上学に一因がある、と本書は主張する。

本書 *The Universe As We Find It* を貫いているのは、言語化に抗う姿勢である。存在論とは、私たちが見出す宇宙の本性、在り方を探究することである。それは私たちが宇宙を語る仕方を分析することではない。このような態度が、書名にも現れている。著者は、言語化された哲学のスタイルではなく、古代から18世紀まで継承されてきた（と著者が主張する）スタイルに従うことを宣言する。

本書の著者である John Heil について簡単な紹介をしておこう。Heil は現在、ワシントン大学セントルイス校の教授であり、形而上学と心の哲学を専門にしている。近年の著作で言えば、存在論についての著作 *From an Ontological Point of View* . Oxford: Clarendon Press, 2003 や、心の哲学の入門書 *Philosophy of Mind: A Contemporary Introduction* 3rd ed. London: Routledge, 2013 がある。専門用語を極力使わない平明な著述に特徴があり、本書もその例外ではない。

本書の構成

本書の構成を簡単に述べよう。まず、本書は大きく二つに分けることができる。2-8章は、Heil の存在論を展開する部分である。それに対して9-12章は、その存在論を応用してゆく部分となっている。1章と13章は、全体のまとめとなっているので、2-12章の各内容を紹介しておこう。

2-5章では、実体と性質という主題がさまざまな切り口から論じられる。

2章では、実体は性質の担い手であるという特徴付けから出発する。複雑な対象が性質を担わないということから、実体は単純であると結論される。さらに、実体は創発性質(emergent property)を担えないという反論から、実体が性質を担うという特徴付けを擁護する。

3章では、実体は他の存在者に依存しないという特徴付けから出発する。無限分割可能な宇宙、無限の実体から構成される宇宙、量子力学が描く宇宙、という三つの反論から、実体は単純であるという主張を擁護する。

4章では、性質(property)が質(quality)であるという主張が擁護される。従来では、質と力(power)は排他的であるという前提があったが、Heilはこの前提を拒否し、性質は力を持った質であるという立場を採る。

5章では、性質は普遍者(universal)なのか個別者(particular)なのかという文脈において、性質は様態(mode)であるという主張が擁護される。様態は、特定の実体の特定の在り方のことである。立場としてはトロープの実体-属性説に近い。すなわち、実体抜きでは存在しない個別者としての性質である。実体と様態は相補的(complementary)なカテゴリーであるとされる。

以上が、実体と性質についての話題である。6章と7章は、これまでの実体と性質の存在論に基づいて、因果関係と関係の存在論が扱われる。引き起こすこと(causing)は、従来の因果関係の理解と異なり、相互的(reciprocal)、対称的、連続的(continuous)であると主張される。塩が水に溶けるとき、塩を溶かす水の力と、水に溶かされる塩の力が、塩水という結果を引き起こす。

Heilによれば、関係の存在論のデフォルトと呼べる立場は、関係が存在論的に基礎的(fundamental)であるとする立場である。しかし彼はそれを拒否して関係は基礎的な存在者ではないと主張する。さらに、すべての関係は内的(internal)な関係であるという立場を擁護する。

8章では、truthmakingが内的関係であるという前提によって、帰結、必然性、スーパーヴィニエンスに訴えるtruthmakingの特徴付けを批判する。また、truthmakerを知ることと、真理条件を知ことは異なるということが指摘される。これらの混同が、Heilの言う「言語化された形而上学」の誤りを生むとされる。

以上の章が、謂わば存在論を述べるものであったのに対し、以下の章では、Heilの専門である心の哲学に近い話題へと移っていく。ここから先では、出来上がった存在論をテストするという意図がある。

9章では、ある真理が物理学の真理に還元不可能だとしても、物理学がコミットする存在者以外の存在者にコミットすることにはならない、ということが主張される。10章では、クオリアの産出を支配する法則は、物理学の基礎的法則から導出できないという意味で基礎的である、とするチャルマーズの説が批判される。11章では、質を持った対象を見る経験は、その経験自体が質を帯びることを必要としない、とする表象主義から、経験が質の特徴を持つという主張が擁護される。12章では、思考を行うためには言語が必要であるとする立場が批判される。思考を行うために必要なのは、像(imagery)である。

以上のように、本書は非常に多岐にわたる内容を扱っている。しかし、それを網羅的に紹介するよりも、話題を絞って批判的に検討していくことにしたい。ここで評者が選ぶ主題はtruthmakingである。なぜならこの考えは、本書における存在論の評価で最重要の課題を果たすために、本書の全般で用いられるからである。その課題とは、次の二つを調停することである。一つは、個別科学と日常生活において私たちが見出すものとしての宇宙の一目瞭然(manifest)なイメージ。もう一つは、基礎的(fundamental)物理学において現れる宇宙の説明である。

この二つの調停は、truthmakingを用いて次のようになされる。すなわち、個別科学(生物学、心理学、社会学、人類学、etc.)がこの宇宙について語る真理が物理学の真理に還元不可能だとしても、それを真にするもの(truthmaker)は物理学が明らかにする実体と性質だけである。還元とは言語間に成り立ち、存

在間には成り立たない。還元不可能な真理の領域ごとに、別の新たな基礎的存在者を付け加えてしまうのは、言語と形而上学の混同である。言語がそれ以上分析できないことは、実体が他のものに依存しないこととは異なるのである。

本書への批判 - 必然化主義の擁護 -

さて、以上のように本書において中心的な役割を果たす truthmaking について、批判的に検討していこう。Heil は truthmaking が内的な関係であると主張する。内的な関係と外的な関係の違いは次のようになる。

たとえば、シンミアスがソクラテスよりも背が高いという関係が成り立つとしよう。この関係は、シンミアスとソクラテスが現実と異ならないかぎり、常に成り立つ。一方、シンミアスとソクラテスが2マイル離れているという関係を考えよう。この関係は、シンミアスとソクラテスが現実と同様であったとしても、成り立たない場合がありうる。また、シンミアスとソクラテスが現実と異なったとしても、成り立つことがありうる。

2マイル離れているという関係の成立は、シンミアスやソクラテスの内在的特徴以外に依存する。それに対して、より背が高いという関係は、シンミアスとソクラテスの内在的特徴だけに依存する。誰かと誰かが2マイル離れているという関係は外的関係だが、誰かは誰かより背が高いという関係は内的関係である。

この意味で、truthmaking 関係は内的関係である。つまり、truthmaker と真理の担い手、これら二つの関係項があれば、それだけで truthmaking 関係が成り立つには十分である。

これらを踏まえると、Heil によれば、必然性に訴える truthmaking の概念（このような概念をとる立場を以降では必然化主義と呼ぼう）は誤りである。それを見るために、次のことを確認しよう。T図式によれば、次の二つは正しい。

- (1) もし「雪は白い」が真であれば、雪は白い。
- (2) もし雪は白いならば、「雪は白い」は真である。

必然化主義には(2)の場合に問題がある。なぜなら、雪が白いことは、「雪が白い」の文の存在を必然化しないからである。まだどこにもそれを表す発話も記述もないような宇宙の在り方というのは無数にある。だから、必然化主義は間違っている。これがHeilの第一の批判である。

まずこの批判への第一の反論として次のことが言える。何の文の truthmaker なのかを明らかにする前に truthmaker が何かと問う事は意味をなさない。よって、文「雪が白い」が存在しない場合に、「雪が白い」の truthmaker を問うことは意味がない。だから、必然化主義は、「ある存在者が文Sの truthmaker である ⇒ 必然的に、文Sが存在しその存在者が存在するならSは真である」と言えよ。

Heil の批判への第二の反論は以下になる。それは、彼が指摘したことは問題点ではなく、むしろ真理の非対称性と呼ばれる次の特徴を捉えているのではないかということである¹⁾。真理の非対称性とは、次の(3)は否定しがたいが、(4)は受け入れがたい、という非対称性のことである。

- (3) 「雪は白い」が真であるのは、雪が白いからである
- (4) 雪が白いのは、「雪は白い」が真であるからである

これは、どの真理が真にされるのかは宇宙のあり方によって決まり、宇宙のあり方はどの真理が真であるかによって決まるのではない、という直観を反映している。真理の非対称性に反映されるこの直観は、書名にも表れているように、まさに本書を貫く考え方でさえあると言えるだろう。

(3) を次のように説明しよう。それは、雪が白いことが存在することなしに、「雪は白い」が真であることはないということである。truthmaker理論において(1)が常に成り立つのはこのことを捉えている。これは通常、「必然的に、すべての真理はtruthmakerを持つ」とする原理として捉えられる。

一方、(4)は受け入れがたい。このことを次のように説明しよう。それが受け入れがたいのは、雪が白いことは、「雪が白い」が真であることなしにも存在できるからである。そしてこのことはまさに、truthmakingとしては(2)が常に成り立つわけではないということにおいて、捉えられている²⁾。文Sのtruthmakerは、もしも文Sが存在しないならば、それを真にしない。

このように、Heilが必然化主義を批判したこの点は、むしろ必然化主義の動機を強化することになる。真理は宇宙に依存するのであって逆ではないという、同じ直観をHeilも共有するならば、このことは必然化主義をHeilにとって魅力的にするだけだろう。

Heilが提出した、必然化主義への第二の批判に移ろう。彼によれば、truthmaking関係は内的関係である。シンミアスがソクラテスよりも背が高いということは、シンミアスが6フィートであることと、ソクラテスが5フィートであるということが与えられることによって成り立つ。同様に、雪が白いことが「雪は白い」という文を真にするという関係が成り立つのは、雪が白いことと「雪は白い」という文が与えられることによってである。雪が白いことがそれを必然化するという言い方は、ソクラテスが5フィートであることが、シンミアスがソクラテスよりも背が高いということを必然化するという言い方と同様の誤りである。

この批判への第一の反論として、必然化主義は必然的に、文Sが存在しその存在者が存在するならSは真であると言えよなので、そもそも雪が白いことだけから必然化されとは言わなくともよい。

第二に、次のような反論ができる。ソクラテスが5フィートであることが、シンミアスがソクラテスよりも背が高いということを必然化することは確かにおかしい。しかし、雪が白いことは、「雪は白い」が真であることを必然化するとき、そのようなことを述べているのではない。これを確認しておこう。

- (5) 雪が白いことは「雪は白い」を真にする
- (6) 必然的に、雪が白いことが存在するなら「雪は白い」は真である

(6)は、(5)のtruthmaking関係を、必然化として理解したものである。これを次の(7)、(8)と比べてみよう。

- (7) ソクラテスは、シンミアスより背が高い

(8) 必然的に、ソクラテスが存在するならシンミアスはソクラテスより背が高い

(8) は、(7) のより背が高い関係を、必然化として理解したものである。必然性がかかっている条件文の後件を見てみると、(8) では「シンミアスはソクラテスより背が高い」となっており、(7) の関係全体が現れているのに対し、(6) では、「雪は白い」は真である」となっており、(5) の関係項のひとつである雪が白いことは含まれていない。

したがって、Heilが出したこの例は、truthmaking関係との間に類似性がない。そこで、類似性があるような例を考えてみよう。

(9) 性質の担い手であるということが、その存在者を実体にする。

(10) 必然的に、性質の担い手という特徴がその存在者に存在すれば、その存在者は実体である。

まず、(9) で言われる実体にするという関係は、内的関係である。これを、(10) のように必然化で理解した場合、Heilはこれを否定できないはずである。というのも、Heilは実体に関するこの主張が必然的だと本書の中で認めているからである (2章、8章)。

さらに、より背が高い関係と類似の内的関係でさえ、関係項の一方の存在によって必然化される例があるように思われる。たとえば、次のような例を考えよう。

(11) 実体はトマト以上に単純である。

(12) 必然的に、実体が存在するなら、実体はトマト以上に単純である。

Heilの存在論に従えば (2章、3章)、実体の存在は、それだけで、あらゆる存在者以上に単純であることを必然化する。

以上のように、内的関係は、その成立にとって関係項の両方が与えられれば十分だが、必要であるとは限らない。よって、内的関係かそうでないかということだけから、truthmaking関係を必然化として捉えることが誤りであるということを結論することはできないだろう。

注

- 1) 真理の非対称性というアイデアは、Rodriguez-Pereyra, Gonzalo. "Why Truthmakers." *Truthmakers: The contemporary debate* (2005): 17-32. や、Dodd, Julian. "Negative truths and truthmaker principles." *Synthese* 156.2 (2007): 383-401. や、Liggins, David. "X—Truthmakers and the Groundedness of Truth." *Proceedings of the Aristotelian Society* (Hardback). Vol. 108. No. 1 part2. Blackwell Publishing Ltd, 2008. で扱われている。
- 2) Dodd, Julian. "Negative truths and truthmaker principles." *Synthese* 156.2 (2007): 383-401. の中で、このような形で真理の非対称性を扱う可能性が示唆されている。この論文の中では真理の担い手が命題なので、それはできないということになっているが、Heilが批判しているのは真理の担い手が文である場合なので、この扱いはむしろうまくいく。

